

「パックス・モンゴリカ」時代の 文化交流史 ～文化交渉学の視点から～

第17期社会学研究会
アジアダイナミズム班

学部生：藤川竜輔、三浦雄太、矢野雅大
大学院生：菅沼孝陽、佐藤力、阿達敏洋
五十嵐郁一、中里健吾、中村淳
馬尚慶、小谷田篤
指導教員：金美徳教授、越田辰宏教授

写真出所：Wikimedia Commons（中央の「景泰園」は著作権フリー）

Agenda

1. 振り返り（2017年～2024年 論文のテーマ）
2. 研究目的・方法
3. 研究対象
4. 2025年度の研究テーマ・領域・成果
5. フィールドワーク
6. 参考文献
7. 年間スケジュール

1. 振り返り（2017年～2024年 論文のテーマ）

モンゴル帝国史の8年間の研究（今年で9年目！）

年度	タイトル	頁数
2017	モンゴル帝国のユーラシア興隆史	107
2018	モンゴル帝国の興隆と衰退	244
2019	モンゴル帝国と朝鮮半島	84
2020	パンデミックのユーラシア史とポストコロナ	118
2021	倭寇とモンゴル帝国史～海洋の渡海民と大陸の遊牧民～	106
2022	華人華僑とモンゴル帝国史	81
2023	モンゴル帝国の衰退から見る宗教と統治	89
2024	モンゴル帝国の遺産	229

2017年度～2021年度の論文が書籍として出版
されました(2023/3/30発売 全240頁)



2. 研究目的・方法

- ✓ アジア班が目指す論文は、歴史の視点から「**現代的意義**」を見出す
- ✓ 「**文献研究とフィールドワーク**」を中心に研究活動を行う
- ✓ 研究テーマに対して「**文化交渉学**」を参考にしたアプローチを行う
- ✓ フィールドワークは「**博物館**」の文物視察や「**現地訪問・体験**」を行う

3. 研究対象：「パックス・モンゴリカ」とユーラシアの文化交流

パックス・モンゴリカとは

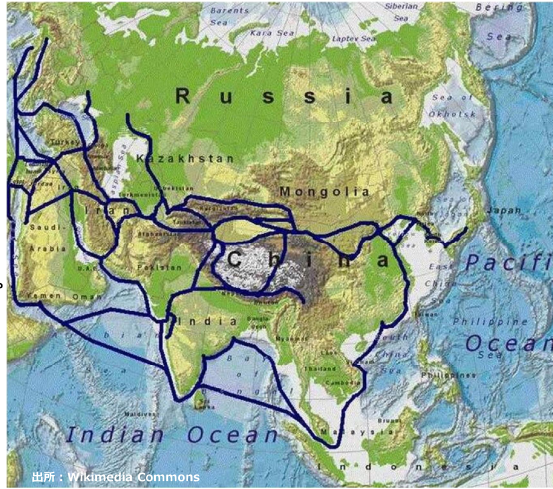
1206年のチンギス・ハン即位から1368年の明朝成立まで、ユーラシア大陸を支配したモンゴル帝国の覇権による安定した時代を、パックス・ローマ（ローマの平和：1～2世紀）になぞらえた言葉である。（パックス（PAX）はラテン語で「平和」の意）

モンゴル帝国の最盛期の領土は約3,300万km²、地球上の陸地の約17%を占め、人類史上、大英帝国に次ぐ2番目の大きさであり、人口は約1億人に及んだ。

本論文では「モンゴル帝国の支配による広域にわたる政治的安定によって、分断されていた地域が繋がれ、人々が自由に往来できるようになり、文化交流が栄えた時代」という主旨で使用する。

Cf. パックス・ブリタニカ（19世紀の大英帝国最盛期）

パックス・アメリカーナ（20世紀のアメリカ覇権）



出所：Wikimedia Commons

4. 2025年度の研究テーマ

問題意識

- 13～14世紀にモンゴル帝国の統治が実現した広域支配圏とその安定（パックス・モンゴリカ）は、分断された地域を結びつけ、異文化の交流を活発化させた。
- 「パックス・モンゴリカ」による文化交流のダイナミズムを、環ユーラシア交易網が実現した物産・技術・文化の相互交流の探求によってあぶり出したい。
- 現在、自国第一主義、戦争・紛争、宗教対立など、世界で進む分断化の動きに対し、モンゴル帝国の歴史から得られる教訓は何か。

研究課題

- 「パックス・モンゴリカ」による広域交易、経済圏を実現したモンゴル帝国の統治機能
- 3つの交易路（ステップロード<草原の道>、シルクロード<オアシスの道>、マリナーロード<海の道>）の果たした役割
- 交易された物産、伝播した技術の歴史的意義
- モンゴル帝国が果たした文化圏同士の文化交流を「文化交渉学」の視点で考える

4. 「パックス・モンゴリカ」への文化交渉学的アプローチ

文化交渉学とは

「文化は常に他者との交渉を通じて形づくられる」という視点を基本に、文化の生成、伝播、変容を研究する学問

文化は越境する

文化は固定しない

文化は孤立しない

モンゴル帝国の広域支配がもたらした
文化のダイナミズムを探求する

接触

受容

流通

消化

摩擦

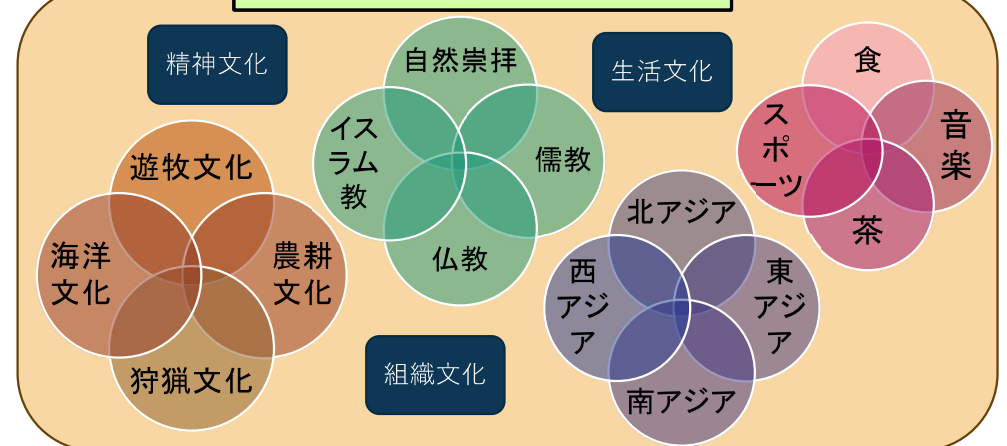
変容

定着

影響

4. 「パックス・モンゴリカ」への文化交渉学的アプローチ

モンゴル帝国の広域支配



4. 研究論文担当

カテゴリー	章	タイトル	執筆担当
精神文化	第1章	パックス・モンゴリカの成立に影響を与えたモンゴル民族の精神文化	五十嵐 郁一
	第2章	元朝、チンギス・ハン、フビライ・ハン中国の教科書から見る歴史観	馬 尚慶
組織文化	第3章	パックス・モンゴリカにおけるモンゴル帝国の広域統治と多民族支配の仕組みから、現代の組織文化の在り方を学ぶ	中里 健吾
	第4章	モンゴル帝国の血統主義と女性の果たした役割及び現代への継承	佐藤 力
生活文化	第5章	チンギス・ハンのリーダーシップに学ぶ「感情の転換」	小谷田 篤
	第6章	モンゴル帝国と中国の伝統音楽の歴史と感性	藤川 竜輔
	第7章	モンゴル帝国の繁栄を支えた食文化	矢野 雅大
	第8章	モンゴル相撲ブブの広がり	三浦 雄太
	第9章	モンゴル帝国における多言語政策と印刷文化の展開	阿達 敏洋
	第10章	モンゴル帝国時代と茶：文化的緩衝材としての茶の発展	中村 淳
	第11章	モンゴル帝国の自由貿易期における琉球の発展	菅沼 孝陽

精神文化：パックス・モンゴリカの成立に影響を与えたモンゴル民族の精神文化（五十嵐）

研究テーマ

- 中国で生まれた茶の歴史、モンゴル民族の精神文化は「パックス・モンゴリカ」の成立にどのような影響を与えたのか？
- 未来に向けて、分断と対立を超えた安定的国際平和秩序の構築に活かせる教訓とは何か？

研究結果概要

1. **モンゴル民族にとって、自然崇拝的な「 Tengri教」が精神的支柱となっていた。**
2. **モンゴル民族社会において、生命創造の象徴である「母性原理」が霊性・教育・共同体形成の中心に位置していた。**
3. **「Tengri教」と「母性原理」が、「根源的生命力尊重」とでもいうべきモンゴル民族の精神文化の基礎を醸成した。**
4. **その「根源的生命力尊重」が、特定の教義や制度宗教を超えて、複数の宗教的価値観や宇宙観を包摂・調和しうる超絶的な精神文化の枠組みとなっていた。そのことが、多宗教・多文化の共存を可能にする帝国統治の包摂性につながり、パックスモンゴリカを成立させた。**

結論（考察）

「パックス・モンゴリカ」の成立に大きな影響をもたらしたのは、「**根源的生命力尊重**」というべき精神文化であった。それを教訓に、「**根源的生命力尊重**」を現代的な「**科学的自然敬愛精神**」として昇華させ、国際社会で共有することが、分断を超えた新たな平和秩序の構築をもたらす。

「科学的自然敬愛精神」の五原則～生命の奇跡を守り共生の未来を築く

- ① **生命への根源的敬愛**
生命の奇跡に深い敬意を抱き、いかなる命も奪われるべきではないという倫理観を持つ。
- ② **科学と精神の統合的理解**
自然界の法則を科学的に探究しつつ、知性と感性の両輪で世界を捉える。
- ③ **争いの否定と平和の創造**
生命を脅かすあらゆる暴力を否定し、対話と共感による平和的秩序の構築を志す。
- ④ **多様性の尊重と倫理的共通項の発見**
宗教・文化・民族の違いを尊重しつつ、共通の相互敬愛精神を共有する。
- ⑤ **未来世代への責任と共生の実践**
自然と生命の尊厳を守ることを未来世代への責任と捉えて行動する。

精神文化：中国の教科書から見る歴史観（馬）

研究テーマ

- 元朝、チンギス・ハン、フビライ・ハンについて、中国の教科書から現代中国の歴史観を探る。

研究結果概要

中国の中学・高校歴史教材では、元朝とモンゴル支配者（チンギス・ハン・フビライ・ハン）が、「征服者」ではなく多民族国家の統一を実現した政治的リーダーとして描かれていることが明らかになった。用語レベルでは「征服・侵略・支配」といった語が避けられ、「統一・融合・発展」などの肯定的語彙に言い換えられており、暴力性よりも統一と民族融合の物語が前面に出されている。中学教材は「統一と融合」、高校教材は「ユーラシア交流と世界史的意義」を強調する構成で、教育段階に応じて焦点が変化する一方、いずれも元朝を「中華多民族統一国家の完成期」として位置づける点で共通している。これらの叙述は、「中華民族共同体」「大中華」など現代中国の国家理念と結びつき、モンゴルを含む多民族を「中華」の枠内に包摂する統合的歴史観を学習者に内面化させる役割を担っている。

モンゴルは我が国 元朝の建立

蒙古^①是我国北方一个古老的民族。蒙古人善于骑射。逐水草而居。过着游牧生活。12世纪时，蒙古草原上分布着许多部落。相互间为争夺人口、草场、水源和牲畜频繁发生战争。人们盼望草原统一，结束战争。

1206年，铁木真完成蒙古草原的统一，建立蒙古政权。他被拥立为大汗，尊称为成吉思汗。从此，蒙古草原结束了长期混战的局面。『侵略』ではなく『征服』



成吉思汗（1162-1227）

① 蒙古，意为12-13世纪时我国北方草原地带的一个游牧部落。后来随着蒙古的发展和壮大逐渐成为亚洲的游牧民族。

結論：

本研究から、中国の歴史教材において元朝は「異民族による征服王朝」としてではなく、「**中華多民族統一国家の完成期**」として位置づけられていることが明らかになった。

そこでは、モンゴルも「中華民族共同体」の一員として再定義され、元朝の歴史は「征服の歴史」ではなく「多民族が共に国家を築いた中国の発展の一段階」として語り直されている。したがって、教材の中で元朝は中国とは別の他者の王朝ではなく、「中国のもの」であり、中国自身の歴史として完全に取り込まれていると結論づけられる。

組織文化：パックス・モンゴリカにおけるモンゴル帝国の広域統治と多民族支配の仕組みから、現代の組織文化の在り方を学ぶ（中里）

研究テーマ

【モンゴル帝国の「薄くゆるいつながり」による多民族統治から、現代のグローバル組織運営への示唆を探る】

- モンゴル帝国はいかにして広大な領土と多様な民族を統治したのか
- 「統合」ではなく「連結」というアプローチの有効性
- 現代の多国籍企業が直面する文化的多様性の課題への応用可能性

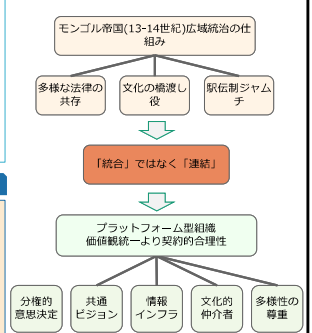
研究結果概要

1. **法的多元主義：各地域の法制度を維持**
・征服地の法律や慣習を尊重し、画一的な法制度を押し付けなかった。中国では中国式、イスラム圏ではシャリーアを維持し、紛争時には「約会」という調停制度で解決した。
2. **能力主義による多民族登用**
・契丹人の耶律楚材、ウイグル人のチンカイなど、征服された民族出身者を高官に登用。ケシク制度により多民族エリートを養成し、色目人が財政・商業の橋渡し役を担った。
3. **ジャムチ（駅伝制）：帝国を連結するインフラ**
・約30kmごとに駅を設置し、情報・物資・人の移動を支援。「薄いが強い」支配ネットワークを構築した。
4. **「統合」の限界と「ドライな合理性」の重要性**
・強力な文化による価値観の統一が困難。むしろ「適度な無関心」と「契約的な合理性」が組織を持続させる。

結論：「薄くゆるいつながり」が多様性を力に変える

1. モンゴル帝国の統治は「**連結**」モデルであり、多様性を認めながら緩やかにつなぐことで広域支配を実現した。
2. 現代組織においても、画一的な統合よりも、各地点の独自性を尊重し、共通のインフラと仲介者で**連結**する方が効果的である。
3. 従業員に過度な愛社精神を求めるとはならず、「この組織に属することが合理的」という**納得感**を提供することが重要である。
4. 多様性が進む社会で持続可能なのは、カリスマではなく、参加するメリットを設計できる「**プラットフォーム型組織**」である。

モンゴル帝国の広域統治から現代組織へ



組織文化：モンゴル帝国の血統主義と女性の果たした役割及び現代への継承（佐藤）

研究テーマ 「チンギス統原理」がモンゴル帝国に及ぼした影響と、男系男子を支えた女性の果たした役割について

- ▶ チンギス・ハンの家系の重要性、血統はどのように尊重され受け継がれて来たのか
- ▶ 男系男子を支えた女性の活躍とその役割について

研究結果概要

1. 「チンギス統原理」の確立
 - ・モンゴル帝国では「チンギス・ハンの男系男子のみが正統な支配者である」という血統主義「チンギス統原理」が確立し、帝国全体の支配秩序を規定した。この原理は分裂後の各ハン国にも引き継がれ、形式的な正統性の基盤として機能した。
2. 「チンギス統原理」の両義性：統合と分裂
 - ・血統主義は帝国の安定と正統性を支えた一方で、後継者間の内戦を引き起こす要因にもなった。
3. 女性の政治的・文化的役割の顕在化
 - ・女性は生活面及びモンゴル帝国の多宗教共存・文化交流を支える重要な媒介者であった。
4. 血統の拡散と現代への影響
 - ・チンギス・ハンの血統は、血統による優遇や婚姻政策により広範囲に拡散し、遺伝的影響は現代にも及んでいる。

結論：血統主義は両義性を持ちながらモンゴル帝国の繁栄の基盤となり、女性は実質的の差配者として活躍した

1. 「チンギス統原理」はモンゴル帝国統治の中核的イデオロギーであり、**帝国の政治的正統性を担保**した。
2. 血統主義は時代と地域を超えて変容しながら継承され、日本の天皇制や現代企業の**家系的継承意識**にも類似構造が見られる。
3. 女性は「男系社会の補充者」ではなく、実質的な**文化的調停者**として帝国の持続に寄与した。
4. 「バックス・モンゴリカ」の根底には、女性を含む**社会的ネットワークの調和的共存**があり文化帝国の形成を可能にした。



チエチエン・ハン、シヨロイから始まる世界最大級の草原 (著者撮影)

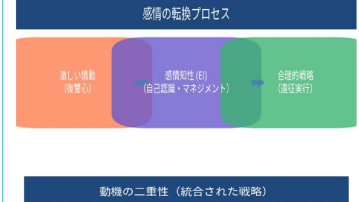
著者：佐藤力 13

組織文化：チンギス・ハンのリーダーシップに学ぶ「感情の転換」（小谷田）

研究テーマ チンギス・ハンの戦略的意思決定に学ぶ感情の転換 - ホラズム遠征に見る感情知性 (EI) に基づくリーダーシップの源泉 -

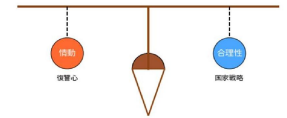
研究結果概要

- ・現代組織の課題：現代組織は、変革推進時に「合理性（効率化・成果主義）」とそれを阻害する「情動（非合理的な人間の感情）」という根深い衝突に直面している。
- ・チンギス・ハンの合理的組織：チンギス・ハンは、幼少期の裏切り体験から血縁や権威の非合理性を痛感し、能力主義による人材登用や駅伝制（ジャムチ）など、徹底した「合理的組織運営」を構築した。
- ・ホラズム遠征の「二重性」：彼のリーダーシップの核心は、ホラズム遠征に見られる。この遠征は、使節団を虐殺されたことへの激しい「復讐心（情動）」と、交易路の確保や地政学的脅威の排除といった「国家戦略（合理性）」という、二重の動機によって実行された。
- ・情動の「エネルギー転換」：彼はこの私的な激しい情動を、高度な感情知性 (EI) 一特に「自己認識」と「セルフマネジメント」によって統制。「復讐心」を、国家戦略（公的な合理性）を達成するための「強大な推進エネルギー」へと意図的に転換し、「活用」した。



結論：

現代のリーダーも、自身の不安や怒りといった情動を単に抑圧・切り離すのではなく、まず「自己認識」する。そして、それを組織のビジョンや合理的な目標達成のための「エネルギー」として「活用」する**感情知性 (EI)**こそが、不確実な時代における組織変革の鍵となる。



著者：小谷田 14

生活文化：モンゴルの伝統音楽、食文化、格闘技の特質と伝播（藤川・矢野・三浦）

共通意識：遊牧民が受け継いだ三伝統（紡ぎ繋いだ3つの軌跡）

研究テーマ **モンゴル帝国と中国の伝統音楽の歴史と感性（藤川）**

モンゴル・中国の音楽を比較し、それぞれの社会における音楽の位置づけや歴史的な文化交流、そして現代への継承についての研究をする。

研究結果概要

- ①モンゴルと中国の音楽思想
モンゴル→「自然との共鳴」と「精神性」を重視している。
- ②中国→「秩序」や「調和」として考えられていた。

結論：

・音楽は単なる文化交流ではなく、**社会や宗教、世界観そのものを映し出す存在**である。
・両者ともに根本的には異なるが、新しい音楽価値を生み出した。

研究テーマ **モンゴル帝国の繁栄を支えた食文化（矢野）**

広大な領域を保有し侵略を繰り返す、圧倒的な力を持ちながら成長していたモンゴル帝国の食文化を遊牧民の生活に沿って調査する。

研究結果概要

- ①遊牧と食→赤と白の食の二つを賢く使い分け食に飢えることはなかった。
- ②食と黒死病→獲物であったマーモットをよく食していたことからモンゴル帝国で黒死病が流行した。

結論：

モンゴル帝国での食文化は**遊牧生活に最適化**されているものであり、狩りをした獲物の血や肉、皮まで余すことなく最大限活用していた。



マーモット (リス科のげっ歯類) 出所: Wikimedia Commons

研究テーマ **モンゴル相撲ブブの広がり（三浦）**

モンゴル相撲ブブの東アジアへの広がり (三浦)
モンゴル相撲ブブの東アジアへの広がり
と文化、欧米に広がらないのはなぜか研究する。

研究結果概要

- ①モンゴル相撲ブブが日本国にくるまで中国、朝鮮を経て競技形は変わるが宗教、祭祀目的などは変化せず伝播してきた。
- ②欧米はすでに宗教が定着していたので広がらなかった。

結論：

モンゴル帝国で栄えたブブは**祭祀的、礼儀的文化を経てアジアに広がり**を見せた。既に宗教的思想が根強く定着していた欧米にはつなげられなかった。

著者：藤川・矢野・三浦 15

生活文化：モンゴル帝国における多言語政策と印刷文化の展開（阿達）

研究テーマ 「記憶媒体の歴史的転換と後々の位置付けを含む再検討」

- ▶ 武力帝国から情報帝国へどのように転換していったのか
- ▶ 知識インフラ国家としての高麗の位置付けは？
- ▶ 記録媒体と技術による統治システムの分析

研究結果概要

1. 文書主義への転換と統治の可視化
軽くて低コストな「紙」の普及を背景に聖旨を紙文書として可視化し、駅伝制度を通じて広域に流通させ統治を持続。
2. 高麗が提供した技術的・物質的基盤
高麗は、耐久性と保存性に優れた紙を供給し、八万大蔵院に見られる高度な木版技術を有し、東アジアの技術センターとして機能する。
3. 多言語翻訳システムと「理解可能な命令」
モンゴル語の命令を各地域の言語（漢語、チベット語、ペルシア語等）へ翻訳・文書化する官僚機構を整備。

結論：

1. **情報インフラによる帝国の結合**
モンゴル帝国は軍事力だけでなく、蔡倫以来の紙で権力を可視化し、印刷で知識を標準化し、独自の翻訳制度による多言語世界を連結した、史上稀に見る「**情報帝国**」であった。
2. **高麗の核心的役割**
高麗は**東アジア印刷文明の中核を担う存在**であり、その製紙・印刷技術は帝国の行政実務や経済システム（紙幣）を底支えし、統治を持続可能とする要因となる。
3. **技術遺産の継承と世界的意義**
この技術遺産は各方面に金属活字文化に継承され、**紙と印刷の「情報技術」**が巨大な多言語、多民族国家の統治を可能にしたことは、ユーラシア世界史において、極めて重要な意味を持つ。



羊皮紙写本製作の様子 (Miracles de Notre Dameより)

著者：阿達敏洋 16

生活文化：モンゴル帝国時代と茶：文化的緩衝材としての茶の発展（中村）

研究テーマ 【文化的緩衝材としての茶の発展】
 > 中国で生まれた茶の歴史、その位置づけ、モンゴル帝国というユーラシア規模の支配体制の下で、茶がいかに交易・儀礼・思想の交差点として機能し、異文化間の接触、受容、平和に貢献してきたのか、そして混沌とする現在の世界状況においてこれからの茶が持つ意味を考察する。

研究結果概要

- シルクロード的文化融合**
茶は中国・モンゴル・中央アジア・朝鮮・日本を結ぶ媒介となり、交易・儀礼・精神文化を横断的に結びつけた。
- 茶の精神化・美学化**
禅思想や武家文化と結びつき、日本では茶が修養・倫理・美意識を統合した独自の精神文化として体系化された。
- 平和と対話の文化資源**
茶は近代以降、国際交流・相互理解・心の平安を象徴する「文化的緩衝材」として位置づけられ、その普遍的価値が再認識された。

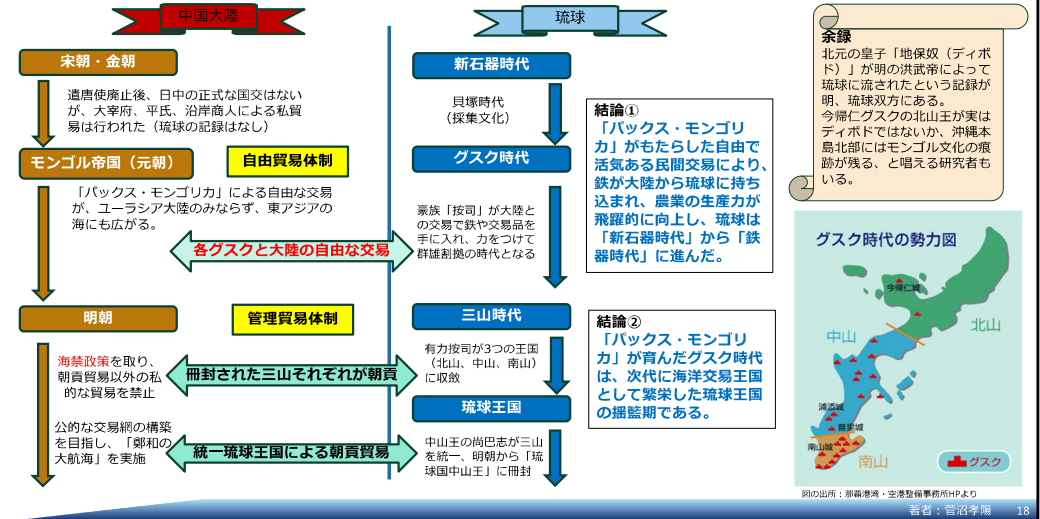
結論：茶は現代社会において“平和と共感を生む緩衝材”たり得る

- 茶が文化・宗教・民族を超えて共有される中立的媒介として、異文化交流を円滑にする役割を持つシルクロード以来の伝統を継承し、茶は今も国境・宗教・政治的立場を越えた普遍的コミュニケーション媒体として機能する。
- 茶室の“間”と譲り合いの所作が、他者尊重・無言の対話・共感的コミュニケーションを形成する茶の湯空間の沈黙・間合い・礼の動作が、競争ではなく調和を基盤とした関係性を生み出す。
- “一碗からピースフルネスを”の思想が、心の安寧から世界平和へ至る道を示している。裏千家鵬斎翁が茶を国際交流・文化外交の軸に据え、個人の心の平和を起点に世界的平和を志向した。

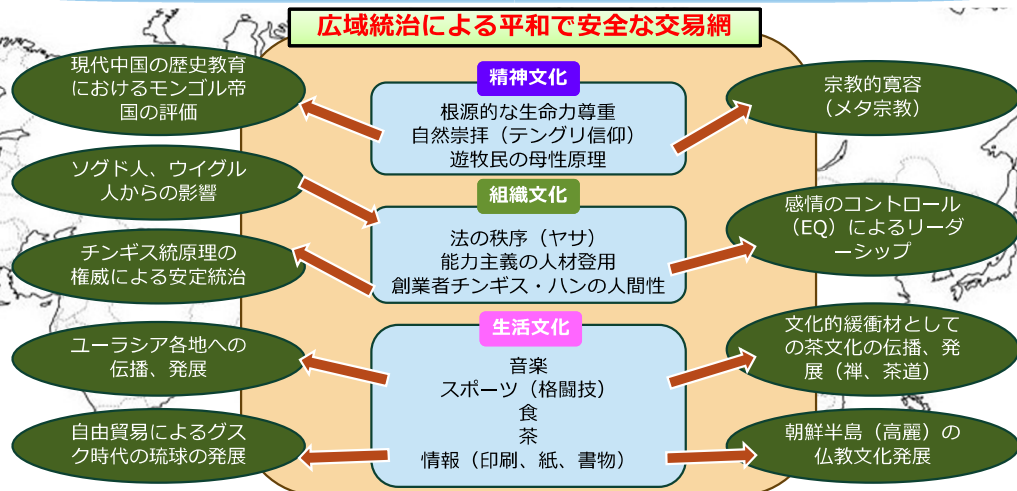


雲南省西双版纳の茶樹 煎茶（餅茶（へいちや））
 著者：中村 淳 17

生活文化：モンゴル帝国の自由貿易期における琉球の発展（菅沼）



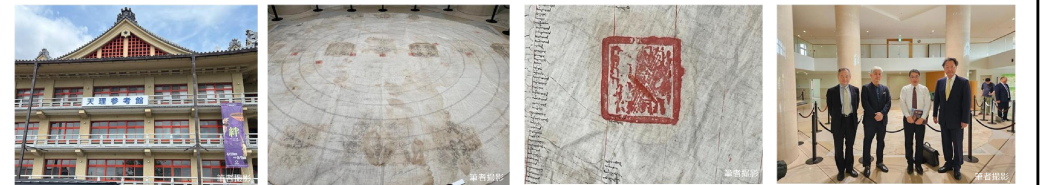
研究のまとめ：バックス・モンゴリカの文化交渉学



フィールドワーク 天理大学附属天理参考館

天理大学附属天理参考館訪問 世界最大級の家系図 見学/意見交換

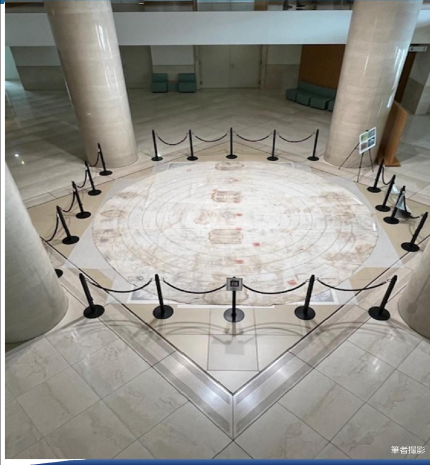
- 面談日時：6月1日（日）13:00~15:00
 - 面談者：先方1名 天理大学附属天理参考館 学芸員 梅谷昭範氏（海外民族室）
 当方3名 大学院生（菅沼、佐藤）、指導教員（金）
 - 内容：天理大学創立100周年記念第98回企画展「絆-ヒトとヒトをつなぐモノ-2025年4月16日~6月2日に展示されている世界最大級の家系図（チンギス・ハンの子孫であるチエチエン・ハーン・シヨロイから始まり14世に渡る）の見学及び梅谷学芸員からの本展示内容の解説を頂く
- ①本家系図が日本、そして天理大学に持ち込まれた歴史的背景は？
 - ②本家系図の特徴は？
 - ③モンゴル帝国にとつての家系図とは？
 - ④モンゴル独立後、ソ連統制下での家系図の位置付けは？



10

フィールドワーク 天理大学附属天理参考館

世界最大級の家系図－直径555cm 記されているのは14世代11,966人、全て男系男子



【本家系図について】

- モンゴル帝国初代皇帝チンギス・ハンの男系子孫である**チエチエン・ハーン・シヨロイ** (1577-1655) を始祖とする家系図

- シヨロイはモンゴル南東部のハルハ部を治めたハーンの一人
- シヨロイ以降の後継者はいずれもチエチエン・ハーンを名乗った

【家系図の特徴】

- 家系図の中心にはシヨロイの名前が記されており、そこから**同心円状に赤い線が世代毎**に区切られている
- モンゴル文字+満洲文字**で記載されている
- 文字が染みしていないことから、インクには膠(にかわ)を使用しているのではない
- 朱印は1カ所を除いて布と布のつなぎ目に割印する形で押されており、**偽造防止を目的**にしたものではない

フィールドワーク モンゴル国の平和の祭典「ナーダム」2025

古代から遊牧民族に受け継がれた競技大会が、社会主義時代を経て、平和の祭典に

ナーダムとは

起源は匈奴時代、紀元前3世紀にさかのぼるといわれ、「**ブフ(相撲)**」「**競馬**」「**弓射**」の「**男の3競技**」が競われる。

現代にも受け継がれ、夏季にモンゴル国、中国・内モンゴル自治区の各地で行われており、2010年にユネスコの無形文化遺産に登録される。



2025年のナーダムにて、モンゴル国フレルスフ大統領の弓射をご覧になる天皇皇后陛下
出典：宮内庁HP

フィールドワーク モンゴル国の平和の祭典「ナーダム」2025

国家ナーダムの開会式では、遊牧民族としてのアイデンティティが強調された



疾走する騎馬からの射的射撃



伝統的民族楽器、馬頭琴の合奏



年4回行われる遊牧民族の移動(ラクダに乗せたゲル)



野生馬を捕獲する道具



遊牧に重要な役割を果たす犬



国旗を掲げた騎手が会場を埋め尽くすフィナーレ

6. 参考文献 【書籍：計36件】

書籍/論文	著者	書名	出版社	出版年
書籍	1 廣川正謙 他	権威化される世界 14-19世紀(首長権世界歴史1)	岩波書店	2023
書籍	2 中島義典	遊牧王国の歴史「方面」の200年	吉川弘文館	2023
書籍	3 高良倉吉	アジアのなかの遊牧王国	吉川弘文館	1988
書籍	4 高良倉吉	遊牧王国の探求	桜楓社	2011
書籍	5 上原隆史	海の王国・遊牧「遊域アジア」大文藝時代の憂徳	ポスターインク	2018
書籍	6 高野伸・阿部英策子・中本謙・吉成達樹	内モンゴルと中央アジアの遊牧時代	有信社	2008
書籍	7 赤澤守	遊牧王国 東アジアのコーパス・ストレーン	講談社選書メチエ	2004
書籍	8 外野守善	沖縄の歴史と文化	中公新書	1988
書籍	9 余英時	新遊牧王国の歴史 天山と北山	新書出版	2000
書籍	10 余英時	アスク・共闘隊・村 沖縄歴史考 古学序説	桜楓社	1988
書籍	11 比佐信典	今昔仁徳 玄徳の民衆音楽史(上下)	なつ出版	2022
書籍	12 津本隆男	遊牧王国の成立と展開 水かきと沖縄の歴史	日本経済評論社	2021
書籍	13 村井憲介	古遊牧 遊域アジアの輝ける王国	角川選書	2018
書籍	14 岩井茂樹	遊牧・遊域・互市 遊域アジアの貿易と秩序	名古屋大学出版会	2020
書籍	15 藤上肇	シルズ中国の歴史 陸奥の交通 明朝の興亡	岩波新書	2020
書籍	16 上田信	中国の歴史 遊と信 遊牧時代	講談社学術文庫	2021
書籍	17 杉山正明	中国の歴史 8 遊牧する草原の征服者	講談社学術文庫	2021
書籍	18 森安孝夫	興亡の世界史 シルクロードと遊牧	講談社学術文庫	2010
書籍	19 寺島英郎	人類と宗教を巡る日本人の心の基軸	岩波書店	2021
書籍	20 出口陽明	全世界史	新泉社	2018
書籍	21 出口陽明	歴史と宗教 金	ダイヤモンド社	2019
書籍	22 杉山正明	モンゴルの世界史 遊	日経BPマーケティング	2006
書籍	23 杉山正明	モンゴルの興亡	講談社	1988
書籍	24 杉山正明	ゴビラの戦線 遊牧による世界史の大転回	講談社	2009
書籍	25 岡田英弘	世界の誕生—モンゴルの発見と伝説	筑摩書房	1989
書籍	26 池田英	モンゴル帝国 世界のダイナミズムの中心	講談社	2024
書籍	27 Jack Weatherford	パイクス・モンゴリカ 遊牧民の心と魂	岩波出版	2006
書籍	28 吉澤孝也	記憶の継承として生きるソフパ・パワーの展開—21世紀の「パイクス・モンゴリカ」を求めて—	日本国際情報学会誌 2巻1号 p31-33	2017
書籍	29 志賀誠哉・曾子	モンゴル帝国史研究 完結	東京大学出版会	2021
書籍	30 佐藤正南	チンギス・ハンの源流	明石書店	2006
書籍	31 小長谷有紀・前川慶	現代モンゴルを知るための50章	明石書店	2014
書籍	32 小谷正	中央ユーラシアの歴史	丸善出版	2023
書籍	33 高橋孝子	モンゴルの歴史 遊牧民の誕生からモンゴル国まで	乃文書房	2002
書籍	34 占部俊夫・李托雅	モンゴル高麗茶—チンギス・ハンの飲んだお茶—	三省堂	2022
書籍	35 キム・ホドン	モンゴル帝国と世界の誕生	名古屋大学出版会	2023
書籍	36 フリュン・ブツセル	本の歴史	新泉社	1988
書籍	37 橋山隆一ほか編	遊牧権世界歴史15 遊人と市場 ネットワークの中の国家	岩波書店	1988
書籍	38 橋山隆一ほか編	遊牧権世界歴史15 遊人と市場 ネットワークの中の国家	岩波書店	2023

6. 参考文献 【論文：計8件】

書籍/論文	著者	書名	出版社	出版年
論文	1 松井大、白 玉冬、橋本晃一	10～14世紀東方ユーラシアにおける古代ワイグル族ネットワークの展開	JFE21世紀財団 アジア歴史研究報告書	2015
論文	2 Brose, Michael C	Uyghur Technologists of Writing and Literacy in Mongol China	Young Pao, 2005, Second Series, Vol. 91, Fasc. 4/5 (2005), p. 396-435. Bnii	2000
論文	3 松川正義	モンゴル命令文とワイグル文書文化	待兼山論叢 史学篇 2018. 52. p. 1-27. 大阪大学大学院文学研究科	2018
論文	4 松井大	中央ユーラシアのネットワークとワイグル商人	帝京学院 2002-01 世界のしおり p.1-7	2002
論文	5 松井大	文字文化からみた草原とオアシスの世界	東洋文化研究 11巻 p.455-478	2008
論文	6 荒川正晴	ソグド人の移住聚落と東方交易活動	追跡講座世界歴史15：商人と市場：ネットワークの中の国家. 1999. p. 81-103	1999
論文	7 Morgan, G.O	Who Ran the Mongol Empire?	The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, 1982, No. 1 (1982), pp. 124-136. Cambridge University Press	2006
論文	8 Ostrowski, D	The "tamga" and the Dual-Administrative Structure of the Mongol Empire	Bulletin of the School of Oriental and African Studies, University of London, 61 (2), 262-277.	1998

25

7. 年間スケジュール 春学期

回	日付	議題	発表者	文献調査・フィールドワーク	備考	議事録担当
1	4月19日	・自己紹介 ・今年度テーマ方向性			・春学期スケジュール確定	
2	4月26日	・問題意識発表(1)	杉、阿達、菅沼、佐藤		・メンバー確定	
3	5月10日	・ゼミ長・副ゼミ長確定 ・問題意識発表(2)	中里		・連絡用Classroom作成(中里) ・共同作業用Google Drive設定(中里)	中里
4	5月17日	・問題意識発表(3)	菅沼、五十嵐		・研究計画発表準備開始(ゼミ長・副ゼミ長)	佐藤
5	5月24日	・問題意識発表(4)	中村、佐藤	6月1日フィールドワーク(第1回)確定(天理大学付属参考館)	・役割分担確定	菅沼
6	5月31日	・問題意識発表(5) ・テーマ案検討	中里、阿達			阿達
7	6月7日	・テーマ案検討 ・フィールドワーク(第1回)報告 ・発表資料骨子検討	ディスカッション、佐藤			杉
8	6月14日	・テーマ案確定 ・研究計画発表資料確定(最終調整) ・発表リハーサル	ディスカッション	・研究者インタビュー調整	・発表役割&予演日程確定	五十嵐
9	6月21日	・研究計画発表				
10	6月28日	・中間発表準備	ディスカッション			
11	7月5日	・中間発表準備	〃			
12	7月12日	・中間発表準備	〃			
13	7月19日	・中間発表準備	〃	フィールドワーク(第2回)実施		
14	7月26日	・中間発表準備	〃			
15	8月25日～26日	・各宿・中間発表				

26

7. 年間スケジュール 秋学期

回	日付	議題	発表者	文献調査・フィールドワーク	備考	議事録担当
1	9月20日	・自己紹介 ・春学期成果共有	五十嵐		・秋学期スケジュール確定 ・最終メンバー確定	佐藤
2	9月27日	・追加メンバー問題意識発表	小谷田、佐藤	各自文献調査		中里
3	10月4日	・追加メンバー問題意識発表	馬、菅沼	各自文献調査		菅沼
4	10月11日	・問題意識発表	中里、藤川、馬	各自文献調査		阿達
5	10月25日	・問題意識発表	矢野、三浦	各自文献調査		中村
6	11月1日	・発表資料骨子検討	小谷田	各自文献調査		五十嵐
7	11月8日	・発表資料骨子確定	中村、阿達、馬	各自文献調査		藤川
8	11月15日	・発表資料準備 ・論文準備	中里、佐藤	各自文献調査		矢野
9	11月22日	・発表資料準備 ・論文準備	藤川、矢野、三浦	発表資料個人シート提出	・最終発表役割分担決定	三浦
10	11月29日	・発表資料準備 ・論文集約		各自論文集約、まとめ	・最終発表リハーサル	佐藤
11	12月6日	・最終発表				中里
12	12月13日	・Active Learning発表				菅沼
13	12月20日	・年内論文提出				阿達
14	1月10日	・論文最終調整				中村
15	1月24日	・論文最終提出16:00 ・懇親会17:00～				五十嵐

27

2025年度 アジアダイナミズム班 最終発表



ご清聴ありがとうございました

学部生：藤川章輔、三浦雄太、矢野雅大
 大学院生：菅沼孝陽、佐藤力、阿達敬洋、
 五十嵐郁一、中里健吾、中村淳、
 馬尚慶、小谷田篤
 指導教員：金美德教授、越田辰宏教授